

日本の火の神信仰

——特に南西諸島を中心として——

— はじめに

サブテーマに「特に南西諸島を中心として」とありますが、南西諸島というのは、九州と台湾の間の島々のことで、つまり種子島から与那国島までの範囲を指します。これを琉球とか琉球弧としないのは、北部の種子島・屋久島が古来、琉球であったことはないからです。南西諸島という言葉は東京から見た言葉ですので、どうも感心しないのですけれども、他にいい言葉がありません。琉球弧というのは歯切れのよい魅力的な言葉ですが、文学的な表現であり、その北辺の位置がいまいちなので、これは社会科学で使ってはならないと私は思っております。

火の神とかカマド神、こういう研究は今までたくさんありまして、例えば、伊波普猷^①、仲原善忠^②、後の坪井である若いころの郷田洋文^③、

それから窪徳忠氏^④、酒井卯作氏^⑤、大林太良氏^⑥。こういう方々が優れた論文を書いておられます。この他にもたくさんあろうかと思えます。ただ、日本の火の神・カマド神に関する論文を読んでみますと、全体として混然としておりまして、たくさん読むと何が何だか分からなくなるのであります。これではいけないと思い、私の調査資料をもとにして少し整理してみようと考えたわけです。あまり難しく考えないで、できるだけ単純化して、簡単に整理しようというわけでありませう。

沖縄、奄美、これを私は琉球文化圏と呼んでおります。そして、奄美の北のほうのトカラ列島から北海道までをヤマト文化圏と呼んでいます。文化圏という言葉は、文化領域と言うのがいいと言う方もおられますが、ヤマトと琉球の場合には、人もあまり動かないで、太古からずーっと続いて来た文化が存在し、その境い目に一つの線

下野敏見

を引けるような状況ですから、文化圏と呼んで差し支えないのではないかと思うのです。これに対してアイヌの場合には、かつて青森にもアイヌはいましたが、北海道は今や和人が大多数を占めているのでどこに境界線を引くのか難しい状況です。ところで、琉球文化圏とヤマト文化圏というある程度明確に異なる二つの文化圏の火の神を比較するとどうなるか。二つの文化圏は明確に異なるという隣接し、古来双方の影響も大きい。この比較のつぼの中に関係資料をたき込んでみると、さまざまなテーマにおいて大変面白いことが分かって来るのです。さて、火の神は一体、どうでありましよう。

それから、ヤマト・琉球の接点はトカラ列島であり、そこには琉球の文化が及んでいるし、又、ヤマトの文化も及んでいるのです。狭い意味では、琉球文化圏というのは奄美をもって北の境にします。が、広い意味ではトカラ列島を境にすることができます。そこで、火の神は接点のトカラにどのように影響しているだろうか。それをよく見ながら、日本列島全体を考えてみたいのであります。又、アイヌの火の神、東北の火の神あるいはカマド神というのはどうなっているのだろうか。そして、日本列島の比較の中から火の神の形成について、簡単に理解してみたいというわけでありまう。

火の神信仰はいつ頃から日本で始まったのだろうか。これは大変なことであり、又、愚問かもしれませぬ。弥生人は火の神

を祀ったものだろうか。縄文人はどうだったのだろうか。当然こういう疑問も湧いてきます。それを示す都合のよい出土品は、なかなかありません。本論ではそこまで及びませんが、考えてみなければならぬ問題です。

二 トカラ列島の火の神

(一) 北部、中部、南部の火の神

トカラ列島の火の神は、北部、中部、南部の別によって少し違ってきます。そもそもトカラ列島は七つの有人島からなっています。臥蛇島というのが今無人島化しましたが、これを含めると八つの島からなるのです。それらのうち、北部とは口之島、中之島、臥蛇島の三島であり、これらは大体似たような民俗の島であり、中部は平島、諏訪之瀬島、悪石島の三島で、これも大体似たような島々です。南部は、小宝島と宝島。諏訪之瀬島はいったん無人島化したのですが、その後、奄美大島からの移住者を中心に本土からの移住者も加わっているのです、ちょっと違ってきます。

以上のうち、北部の口之島では、床の間に供えたアンドンを通して火の神を拜むのです。そのとき内神うちかみも同時に拝みます。このアンドンには水、火というふうに墨で書いてあります。それから、口之島では新築の家に「火の神入れ」をするときは、女性神役のネーシ（内侍）が床の間で琉球竹の笹をもって、お祭りをするので。中

之島でも床の間から火の神入れをします。ただしこれは口之島、中之島だけであって、他の島では火の神を祀る場所はちゃんと決まっているのです。中部の方では末の間（茶の間）の柱の人の丈より高い位置に板一枚の棚を設けて、花瓶と茶碗をおいてあります。傍らに琉球竹の笹もおいてあります。これは煤を払うものですが、同時に火の神への供え物でもあります。南部についてはあとで述べます。

(二) 火の神と火の神山

ところが、中部の方ではもうひとつ面白いものがあります。火の神山というのがそうです。それは母屋のすぐ下手の、台所の近くの藪であってそこを火の神山と呼ぶのです。そこにはいろんな木が生えておったりいたします。アクチギの木とか琉球竹とかタブとかあって一定していないようです。中には木はなくて小石を盛ってしるしにして祀ってあるところもあります。それぞれの家の外に火の神山があって、家の中には母屋の台所の近くの末の間にヒノカミドンという火の神があるのです。ヒノカミドンと火の神山の二重に火の神を祀っているというわけで、大変興味深い形態です。それを祀る人は主婦であります。例えば平島の場合にはおよそ三十戸ばかりの民家がありますが、そのうち半数の十四戸で火の神山を祀っています。その十四戸は古い家筋で、毎月の一日、十五日、二十八日の日に拝んでいるのです。一日、十五日、二十八日は、トカラ列島全域で神

拝みの日になっています。これらの日は火の神だけでなく、あらゆる神々を拝む日です。

ところで、どうして火の神山があるのかということが問題ですが、簡単に私の考えを述べますと、まず、トカラ列島では母屋をオーエと言います。そのほかにカマヤがあります。それからタクラががあります。そのカマヤでも火はもちろん焚くわけです。ところが、昔はカマヤに火の神を祀った例もあつたようです。今ではほとんどオーエの台所に祀っています。これは屋内の場合ですが、火の神山というのは屋外に祀ってありますから、これは、カマヤが成立する前の火の神ではないかと考えております。居住棟のオーエがあつて、そして大体暑いところですから、外の庭に三つ石をおいて火を焚きますとカマヤも要らない。ところが、その三つ石はのちのち残るわけであつて、そういうものを、オーエの外隅に整理して祀つたのではなからうかと思うのです。石を祀ってあるところはありますが、全部が全部ではありません。まあ、このように火の神山のルーツを考えてみるのです。

その機能はどうかと言うと、ヒノカミドンは家の中の火の神ですから家を守護しますが、火の神山は、屋敷を守護するものです。拝み方は、まずヒノカミドンを拝んでからその後火の神山を拝むという順序です。しかし、稀にはヒノカミドンを通してちょうど沖繩でトオシウガンするようにして、火の神山を拝むこともあります。

その拝むときの拝み方は両方の手のひらを上にして目通りに上げて拝むのです。家の中に祀ってあるウチガミも、又、火の神も同じようにして拝みます。この拝み方は合掌ではなく、拍手でもありません。したがって仏教でも神道でもありません。このような拝み方は実は沖縄でもするので、私は宮古島でもこうして拝む姿を見て感動したことがあります。又、アイヌも全く同じようにして拝みます。

つまり日本列島の南北端が、このような拝み方をするわけです。そして、琉球文化圏内で見ますと、その南北端がこういう拝み方をするということになります。ですからこれは、周圏論の立場から見ますと、非常に古い拝み方ではなからうかと思うのです。仏教が入って、合掌し、又、神道ができて拍手しますが、そういうものができあがる以前の日本の拝み方ではなからうかと考えることができます。そうすると縄文人あたりの拝み方はこれで拝んだのではなからうかと考えてみるのです。もっともイスラム教の拝み方もこれと同じで、そうなる世界的な拝み方に連なるわけですが……。

トカラ列島の民家は田の字型を基本にして、南側に縁があります。間取りはオモテ、ウチネ、ナカザイ、末の間となっているのですが、オモテに仏壇があり、ウチネにはウチガミとクイヤサマ(高倉の神)を祀り、末の間に火の神を祀ってあります。そして、縁側の隅には七島正月のときだけオヤダマというのを祀ります。七島正月は旧暦十二月一日から七日の間までの期間です。仏壇は本来は仏様を拝む

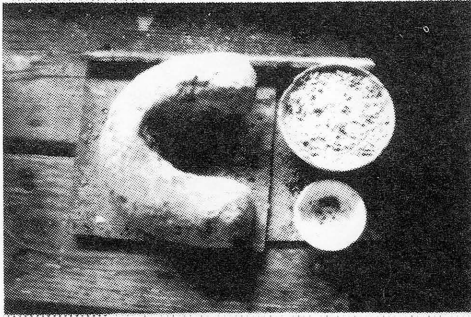
ための棚であって、そこには先祖の位牌はないわけです。もっとも近年は位牌がここにありますが。七島正月のオヤダマ祭りのときには位牌を縁側の隅のオヤダマの棚に移して拝みます。トカラの家の中にはこのようにいろんな神や仏がいるのですが、これらを拝む順序は第一にウチガミで、第二に火の神なのです。

奄美や沖縄では、まず最初に火の神を拝むのに対して、トカラ列島では火の神を非常に重視はするけれども、ウチガミの次に拝むのです。ウチガミは一体何かと言いますと、それはよそにある有名な神社や島内の位の高い神、そういうものを勧請した神様で家族の守護神です。ウチガミは自分たち家族で拝むせいか、ウチネという納戸に相当するところのあまりきれいではない部屋で拜んでいます。火の神は家を守る神ですが、これは家族も建物も含むというような総合的な家を守る神様です。奄美や沖縄では第一番目に拜まれる火の神ですが、トカラ列島では二番目に拜まれ、南九州になると、第一は仏壇又はカミ棚、第二にホトケ棚(位牌棚)、第三に火の神、(又はカマド神、又は大黒さん)というぐあいにはだいに拜礼順があとになっていき、火の神の神格が降下するのであります。

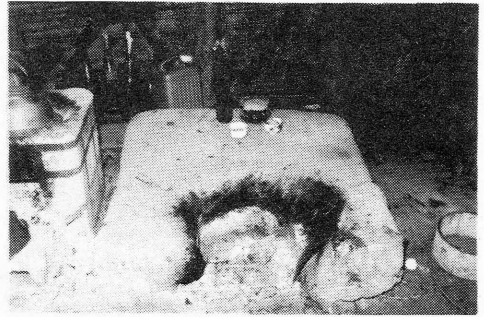
(三) 火の神の目、サワラの尾ヒレ

トカラ列島の南部の方を見ますと、火の神の民俗はまた大変面白い。宝島では、母屋のオモテにあるウチガミの棚の隅に火の神を祀っ

日本の火の神信仰



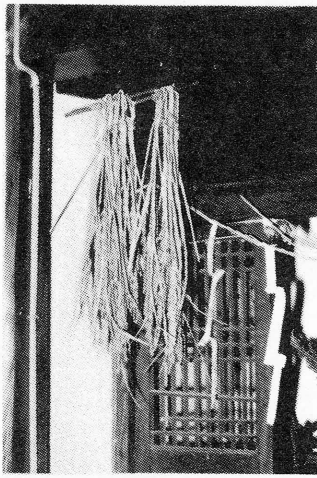
①カマド型の火の神 (加計呂麻島)



②カマドそのものをウカマガナシとして
拝む (与那国島)



③新築の家に火の神入れする巫女
の内侍 (トカラ列島, 口之島)



④火の神に上げる穂掛けの稲
(トカラ列島, 宝島)



⑤火の神と内神を拝むアンドン
(トカラ列島, 口之島)



⑥火の神に供えるサワラの尾ヒレ
(トカラ列島, 宝島)



⑦ウチガミの拝み方
(トカラ列島, 平島)

であるのです。それは、「火の神の目」と言って、菱形又は三角形の目を半紙にたくさん切りあげた旗を供えてあるのです。その火の神の目は本当は半紙に九つの目が五列刻んであるのです。高倉の神様には八つの目が五列ある半紙を上げるのが本当だそうです。これは主婦が作ります。この火の神の目に似た旗は、東北の修験者も作って魔よけにしている例があるので、このことから修験道的なものであるということが分かるのです。だいたいこれは鋸歯紋列の旗であります、菱形紋もやはり鋸歯紋であります。修験道的なもの他にもトカラ列島で検出できますが、ここにおいてもヤマトの修験道がトカラ列島にも及んでいるのが分かります。トカラの火の神は偶像も何の形象もありませんが、火の神の目は魔祓い具であり、聖域表示具であり、火の神がおる場所を示しているのです。

火の神にはサワラの尾ヒレを供える風習があります。サワラは大きな魚ですが、それが取れたときには、尾ヒレを切り取って、家の火の神を祀ってあるところの外のほうに、火の神と向かい合わせるようにして、壁の棧に差すのです。これはシビ魚が取れたときにもいたします。大きなおいしい魚が取れたら、まず火の神にあげるといわけです。トカラ列島では牛を飼っていますが、牛を売るときは牛のしっぽの毛をちょっと抜いて、竹に差し、家の外のほうから火の神に供えます。又、牛が行方不明になると、火の神の前に行つてどこに行っているのかと尋ねます。このように宝島では

特に火の神がいろいろな機能をしているのです。

宝島では火の神に上げるホガケの稲というのがあります。それは、稲の先のほうだけ二本とって、それを一つの束にして、くくって上げるのです。これは本当は九束、すなわち十八本を一本の竹に差し上げて上げることになっています。この結び方をホムスビと言ひ、上げる期日も決まっています。それはシコマのときです。シコマというのは稲の初穂を三本刈って来て家で祝う初穂儀礼ですが、沖縄ではシチュマ、奄美ではシキユマと言ひ、トカラ列島ではシコマと言ひます。ヤマトの初穂儀礼では稲を根元刈りして上げますが、トカラ列島や奄美・沖縄では穂のところだけ切って上げます。これは鎌で根元から刈るのではなく、石包丁で上の穂の部分だけ切り取るのであって、古い時代の稲刈り法を今も残しているわけで、非常に興味深いことでもあります。このシコマは稲シコマのほかには麦シコマもあります。

(四) ネーシ(内侍)と火の神、日の神

宝島では「火の神がかり」という言葉があります。火の神がかりというのは、火の神がかかっているその期間ということで、その間、火の神を拝むということになるのです。そのときに、島のシャーマンでかつプリーストである巫女さんすなわち内侍が祭りをします。宝島と小宝島では、内侍をヌーシと言ひ、他の島ではネーシと言ひ

ます。ところが宝島ではヌーシのほかにキミガミという神女もいます。沖繩の本家筋の家の娘であるニーガンと同じ性格の女性です。こういう人達を選出されて祭りをいたします。その祭りの内容は、各戸を巡拝し、火の神の目なども拝んで回ることです。そのとき火の神の目を作るのは、旧曆十一月二十七日で、その日には各家の主婦は煤払いの琉球竹の笹竹と、火の神の目を神棚に上げて、里芋を供えます。

ヌーシの成巫儀礼として、宝島では面白い儀式があります。それは火の神と関係がありますが、その式をヌーシのシバカブリと言います。ヌーシとキミガミ、それに男神役のタユー（太夫）も参加して行われるのです。シバというのは琉球竹の笹で、それを頭に戴いて、そして四方にも立て回し、逆さにした白の上に腰掛けて、そして扇を持って祭りをします。そのときにヌーシ、キミガミ、それからシバを被る新しいヌーシ、この三人が、「エーヘートーヤ、エーヘートーヤ」と言いながら三角形に地面を回ります。三角を描くということも、面白いことで、鋸歯紋を描くわけです。日本の神田は三角田が多いですが、それを庭で実演するのです。これは、ヌーシの成巫儀礼で、これをもって、新しいヌーシが誕生するといふわけです。このことをカミダシとも言い、生き神が新しくそこに出現したことを意味します。

同じシバカブリのことを、悪石島ではオヤビマツリと言います。

オヤビについてはいろんな説がありますが、親子の親に太陽の日、つまり親日祭りとして解するのがよいようです。これは、旧曆四月と旧曆八月とあって村のネーシと、浜のネーシが現れて、村のネーシが太陽を背にして日元のほうに座り、浜のネーシが日下の方に座りまゝ。こうして向かい合い、その間に若い新しいネーシを立てて、そして、祭りを行います。このときもネーシが全戸の火の神を巡回いたします。この式は新ネーシの太陽との初面会の日なんだそうです。このように、ネーシの成巫儀礼は太陽と深い関係を持っており、同時に火の神と深い関係を持っているのです。トカラ列島ではそういうふうな祭りが展開されていき、そして内侍による屋内の火の神巡拝が行われます。奄美では赤子の初外出は太陽との初めての面会式ともいうべき天拝み式になっていますが、これはトカラの新ネーシの太陽との面会式と通ずるものがある、注目させられます。

この火の神と太陽の日の神の関係は大変面白い問題ですが、どうもはっきりしない点が多いようです。沖繩の場合も、『琉球国由来記』などにいろいろ書かれておりますし、また、一般にもニライ・カナイから太陽が現れ、家で使う火と同根のもののように言われていたりします。同時に本土のほうでも天道信仰の問題もあります。一般的な天道信仰はトカラ列島を南限にして、ヤマト文化圏に広くあるのですが、ただ、沖繩の場合でも太陽をティダガナシすなわち天道さまと言っている、やはり天道信仰が入っているわけです。

さらに天守閣の問題も私は考えなければならぬと思っています。天守閣では何を祀るのか。全国の天守閣を二つ三つ見たのですけれども、どうも復元したものばかりではっきり分かりません。天守閣と太陽信仰は一体どうなるんだろう。これは、中国の道教的な立場から考えたらどうなんだろうというようなことがあります。どうもよく分かりません。

三 沖繩・奄美の火の神

(一) 沖繩の火の神

①火の神の諸相

沖繩の火の神は、ウミチムンすなわちお三つもん、それからウカマガナシ、ヒヌカン。このような呼称が一般的であります。特徴的なのは、通し火の神があるということで、火の神を仲介して、どこかに向かって祈るという通しウガンがあります。火の神の諸相は図に示したように、いろいろな形態があります。これは不完全なものですけれども、段階的にこうではなからうかと考えて書いて見たものです。

②家レベルの火の神と村レベルの火の神

沖繩の場合は、家レベルの火の神は台所に今では祀っており、村レベルの火の神は、同族の場合や門中の場合、あるいは村落の場合といろいろありますが、聖なる建物であるアサギに祀ってある例が

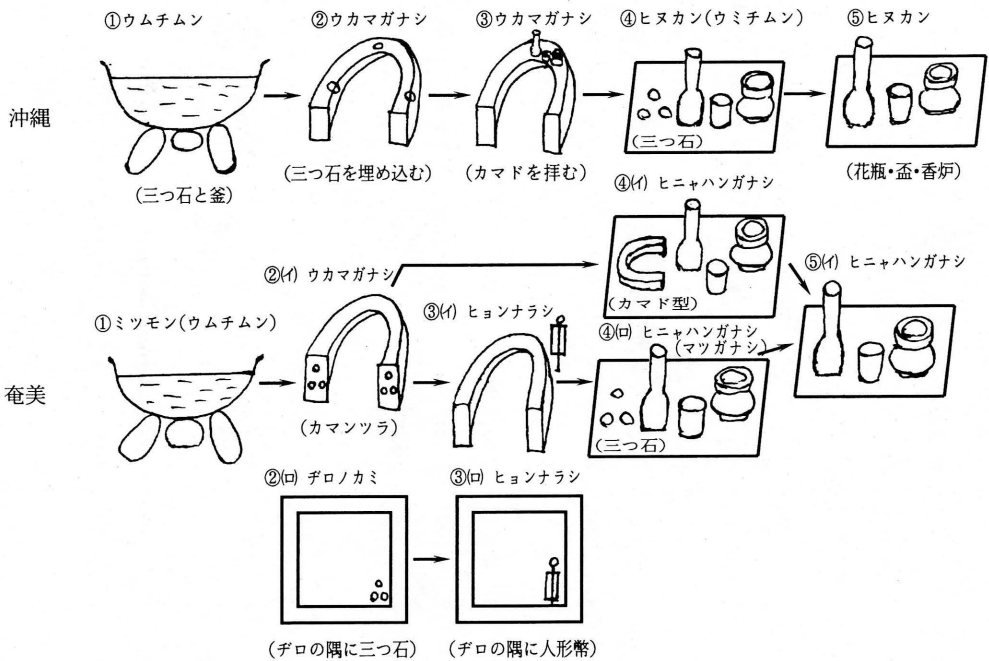


図 琉球の火の神の変遷

多い。アサギでは大概二つ、ウミチムンが並んでいます。聞いてみますと一方はアサギを守る守護神の火の神であって、もう一方は通し火の神だと言います。これらは三個の石をおいたもので文字通りお三つもんです。この他にウタキの火の神のことが由来記にありますが、ウタキの火の神というのは、宮古・八重山には少なく、沖縄本島のほうに多いのであります。沖縄の場合にはそもそも琉球王朝の祭祀で火の神が重視されて、例えば王府の火鉢が大変重視されているようですが、火の神信仰がその宗教組織に組み入れられて、ウタキの火の神も、由来記にちゃんと記載されているのです。そして各地の拝所やアサギの火の神という具合に、ノロが関与する祭りには火の神が必ずあるというぐあいに、宗教組織と火の神が、混然一体となっているのであります。

(二) 奄美の火の神

① 火の神の諸相

さて、奄美の場合はどうでありましょうか。奄美の火の神の諸相は、まずウミチムンすなわちお三つもの。それからウカマガナシ、ヒニヤハンガナシ、チロノカミ、こういう呼称等があります。またいろいろな形態があります。面白いのはチロノカミです。それはカマドを小さくした模型の火の神で現在でもあちこちにあります。それともう一つは、図の奄美②イのように実際のカマドの正面の左右

に三つの丸印をつけて、カマンツラと言っている火の神、それは火吹き竹なんかで三つの丸印を押しあてるもので、徳之島のあちこちで見られたのですが、最近はその台所改善で見られない状況です。喜界島では紙を人形型に切って、それをグヨーテーと言いつ、そのグヨーテーをチロの隅に、あるいはカマドの後ろに供えています。これは非常に特色があるけれども、紙型を切って火の神にするのは実はヤマト的なものです。喜界島には他にも、ヤマトの文化が、たくさんストレートに入っている傾向があります。

② 家レベルの火の神と村レベルの火の神

奄美の家レベルの火の神と村レベルの火の神の場合について述べますと、まず、家レベルの場合には、いわゆるカマヤであるトーグラに祀ってある火の神があります。徳之島などでは、松山光秀氏によると、トーグラに祀ってある火の神とそれから母屋に祀ってある火の神と両方あって、母屋は、デル(いろり)にあたりしますけれども、やはりこれはトーグラの神を第一に拝むのだそうです。トーグラの火の神が、屋内神の出発点であるということになります。もっとも最近はその母屋の台所に収納される傾向が強いです。面白いのは、奄美では火の神をウチガミと言うところがあります。特に奄美大島でそう言いますが、主婦のこともウチガミと言うのです。夫が「うちのウチガミが……」というふうに話すときはその妻のことを話しているのです。主婦が火の神を祀るからそういうわけ

あって、火の神が一番大事なウチガミであるということになります。トカラ列島のウチガミは家の外から勧請した高神のことですが、奄美の場合には昔から屋内における火の神のことですから、ウチガミはウチガミでもトカラ列島の場合と意味が違います。

また、村レベルの場合は、祭祀家屋のトネヤにも火の神を祀ってあります。例えば加計呂麻島の嘉入かにうや須古茂すこも、阿多地あだちなどのトネヤがそうです。それは粘土製の小さいカマド型のものや、香炉と湯飲みだけのものがあります。トネヤは祭りのいろいろな料理を作る場所です。村レベルの場合、加計呂麻島の芝という村落などでは、村の上の山に秋葉神を祀って神社化しています。これは昔、火災があったから祀ったのですが、ヤマトの秋葉信仰もこうしてしだいに入って来ているということです。しかし、これは一般的ではありません。

(三) まとめ―琉球の火の神の特色

さて、沖繩・奄美すなわち琉球の火の神の特色をまとめてみますと、沖繩も奄美も火の神信仰が非常に盛んであるということです。屋内の神々の中で第一番に拜む、それほど大事な神であります。しかし、沖繩と奄美では少し違うようです。例えば、これは中国系の信仰だと思われませんが、火の神が天に上って家族のことを告げると、十二月二十四日に上り、一月の四日に天から下って来て天帝の意向

を伝えるという上天下天のことが、沖繩では言われています。奄美では与論島、沖永良部島まではそれが若干認められるのですが、北大島のほうはないのです。その北隣のトカラでも言いません。又、通し火の神、そういうものも奄美ではありません。それから御岳の火の神のように火の神として正式に祀るのはいないようです。

したがって、琉球文化圏の中でも、沖繩本島を中心とした、別言すれば首里王府を中心とした地域の火の神信仰と、その外周りの奄美の火の神信仰とは若干違うのであります。ということは首里の方が発達しているのであって、奄美の方はまだ首里ほど発達していない。逆に見れば、奄美の火の神信仰こそ、いっそう古い火の神信仰を残しているのではなからうかということが考えられます。それと沖繩では火の神信仰がノロの宗教組織に組み込まれて発達しているが、これは奄美の場合でもノロを中心とした村の祭祀組織の中に組み込まれてはいるけれども、余り発達せず、一般家庭での火の神信仰の形態と差して変わりはないという状況です。

四 南九州の火の神

(一) 火の神の諸相（火の神、オカマサマ、他）

南九州では、これは種子島・屋久島からそうなんです、琉球文化圏の場合とは違って来ます。ただし、種子島では火の神信仰が非常に盛んです。種子島では仏様の次に火の神を拜みます。火の神の

棚は台所もしくは茶の間の隅の高い所に板を一枚打ち付けてあって、それに花瓶と湯飲みをおいてあるという形です。火の神様と云っています。三宝荒神というのは、種子島には一部には入っていますが、全般には入っていません。屋久島も同様です。

ところが南九州、薩摩半島・大隅半島になりますと、三宝荒神あるいは荒神と称しまして、お札を貼るといふ習俗が広く入って来ます。そして竈のそばに祀る神を火の神と言わないで、オカマサマと言うところが多い。もっとも火の神と称するところも点々とあります。又、ヒノカンコ（火の神講）というのが行われます。これは火災除けの講ですが、アックワコ（秋葉講）やアタゴコ（愛宕講）も広く分布しています。また、火の神のしるしは御幣を切って、カマドのそばに供えるという形式が多い。火の神の御幣は、薩摩大口あたりでは半紙を人形型に切って竹に差してあります。オカマサマの御幣も他の御幣の形とは切り方を少し違えてあります。大口では火の神とオカマサマは別に考えているわけです。このような半紙の御幣を切るというのが喜界島にも影響して、先程述べたような人形型のヒヌカンができたと考えられます。

(二) 村レベルの火の神諸相

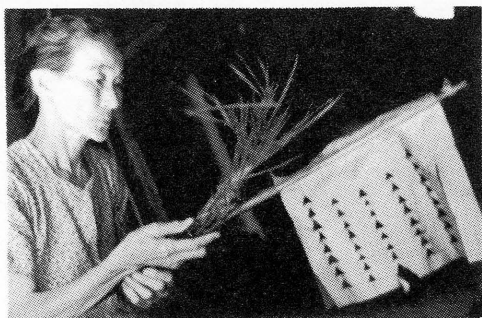
南九州の村レベルの火の神について述べますと、これは一族の場合もあります。例えば薩摩半島の山川町成川というところでは、

ウツガンマツイ（内神祭り）と火の神祭りを一緒にして、その家を中心として一族で祀っています。又、先ほど述べた火の神講や秋葉講とか愛宕講、こういうものが入り込んでいて、それを村で、あるいは一族で、それぞれの社を中心にして開催しているというわけで、この状況は本州につながっているのであります。

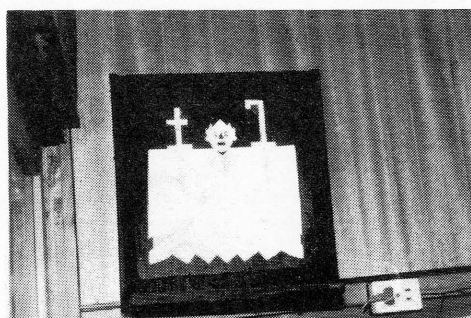
五 ヤマト文化圏の火の神諸相

ヤマト文化圏は広義には種子島・屋久島から北海道までを含みますが、ここではアイヌを考慮して青森までの範囲としましょう。ヤマト文化圏の火の神の諸相としては火の神の呼称もあれば、秋葉神もあり、愛宕神もあり、講も盛んに行われ、三宝荒神も荒神もあるというぐあいにぎやかですが、例えば東北の特に宮城県を中心とした地域に、特色のあるカマガミ³があります。カマオトコとも言いますが、恐ろしい顔を粘土で作って、土間のカマドの上においてあります。それは必ず入り口のほうに向けて置くのだそうです。そのことから考えられることは、火の神の性格というのは非常に降魔的なところがありますから、入り口から悪魔が入らないようにという、そういうことだろうと考えられます。

また、岡山県あたりで私も実際見たのですが、その辺では土公神信仰が盛んです。土公神は中国系の神様だと思うのですが、ここではオドクウサマと言って、カマド神化し、台所のカマドのところ



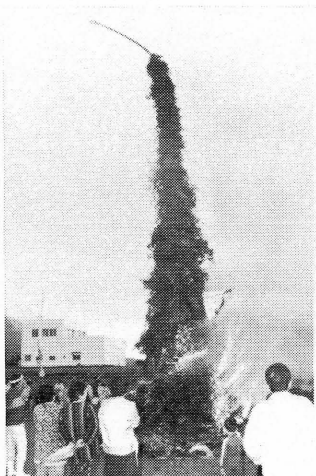
①火の神の目（トカラ列島，悪石島）



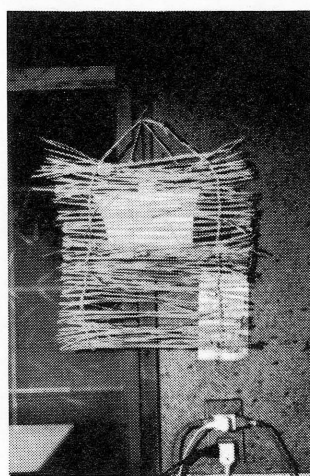
②火の神（薩摩，知覧）



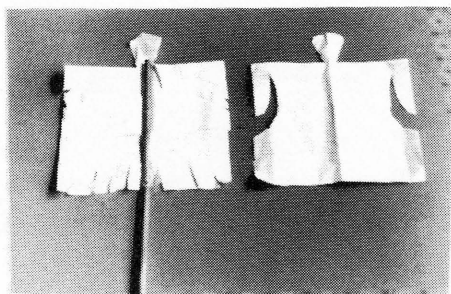
③小さな火祭りのパチパチの木を持つ（屋久島）



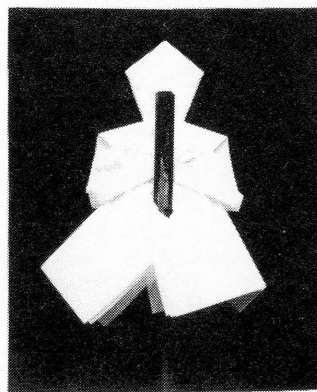
④大きな火祭りの鬼火焚き（屋久島）



⑤火の神（大隅，佐多）



⑥火の神御幣（左）と山の神御幣（右）
（薩摩，大口市）



⑦オカマサマ御幣（薩摩，大口市）

ヤシロ型の箱をおいて、そこに祀ってあるのをよく見ます。カマドと言いますとカマド山信仰も各地にあります。山の上に大きな岩があて、それが天の神様の鍋を煮るところであるなどと言われています。有名なのは太宰府の竈門山と竈門神社です。それから薩摩の金峰山。そんなのは種子島の浦田神社の神山にもあって、御神体が巨大な三つの岩からなっています。こうしたカマド型信仰は日本全国あちこちに見られると思うのですが、その信仰は古代からあるということ、沖繩のオミツモンともつながる古層文化だと思われる。

六 アイヌの火の神

藤本英夫氏によると、アイヌは墓場に死体を埋葬するときに一人の女がついて行って、墓場のところで火を焚くのですが、埋葬が済むまで火を焚き続けるのだそうです。またアイヌの場合は、埋葬した付近に二度と行かないという遺棄葬の埋葬であります。この遺棄葬の埋葬は南西諸島の遺棄葬の風葬とよく共通するし、遺棄葬は日本列島の葬法のベースをなすものではないかと考えられます。

女が埋葬の間火を焚くということは、お盆に焚く迎え火、送り火ともつながって来ますし、もっと広いえば、正月の鬼火などともつながって来ると思うのです。私はこれをごく簡単に言いました、盆の火の迎え火、送り火も祖霊を案内する目印なんというものは

なくて、正祖霊に伴ってやって来る悪霊を、あるいは祖霊そのものをも含めまして、この世にうろちよろしている霊を焼くのだと思うのです。元は祖霊そのものも余り激迎されざる霊ではなかったかとも思います。したがって、盆や正月の火は悪霊を焼く火であり、アイヌの場合も悪霊を焼く火であると考えられます。それは悪い作用を生者に与える悪い霊を焼くわけですが、このように解釈した方がいいのではなからうかと思うのです。

七 大きな火祭りと小さな火祭り

南西諸島の特に奄美、それから沖繩などでは旧暦八月にシバサシという行事があります。それは木のシバやスキなどを屋敷の周りに差して悪魔払いをするのですが、そのときに門口で小さな火を焚きます。糠と草をおいて、主婦が火をつけて、ちょっと煙を出す。それだけです。なぜそんなことをするので私か私が聞いたら、この火は腰から下が濡れている人がやって来るからそれを温めるために焚くのだと、主婦が言われたことがあります。腰から下が濡れている人とは、それは海での遭難者でありましょう。遭難者は尋常な死に方ではないのですが、そういう人をここで温めるのだというわけです。だが遭難者のない家でも焚くのはどういうわけか。理屈っぽくやっていきますとどうもつじつまがはいません。したがって悪霊をここで焼くのだと考えれば、納得できるのであります。

屋久島では、大きな火祭りの鬼火焚きの燃え残りの木を子供が持つて家に帰り、お母さんといっしょに台所で焚いてパチパチいわせるのですが、これは家の悪霊を祓っているわけです。又、大きな火祭りである鬼火焚きでは、村の悪霊を払っているのです。このように火祭りには、村でやる大きな火祭りと、家でやる小さな火祭りとあるのですが、この二つの方式は日本中に見られます^⑩。青森のねぶたや秋田の竿頭、鞍馬の火祭り、各地のドンドや、左義長など、冬の火祭りもあれば夏の火祭りもあって、日本中にぎやかです。

大きな火を焚くのは冬になると太陽の力が弱いからそれを強めるためだなどという説もありますが、本来はやはり悪霊を焼くのではないかと思われます。修験者の柴燈護摩も修験者が修行する際に煩惱を断つために、又、諸悪霊をなくするために火で焼き尽くすのでありますが、盆や正月の火の意味とつながっているのであります。

八 まとめ

以上述べたことについて、簡単に次のようにまとめてみたいと思います。

①ヤマト・琉球の火の神は、琉球のほうはオミツモンやカマド型に見るように非常に具象的です。火を焚く場所を具象的に表わして火の神としています。それに対してヤマトのほうはやや抽象的です。神様自体の表示はいろいろと具象的になる傾向がありますが、カマ

そのものは非常に抽象的になっているようです。

②ヤマトとアイヌ、ヤマトと琉球の火の神の比較では、これはさつき述べたようにアイヌと琉球は火の神信仰が盛んで、拝み方も似ているというわけで、どうもこれは古い時代の大きなつながりを示すのではないか。アイヌは、直接琉球の文化と比較できるかどうかいろいろ問題もありますが、又、オホーツク文化等の影響もありましようが、しかしながらアイヌはやはり古い文化を引きずっているであろうと考えられます。その証拠が今述べたアイヌ・琉球の火の神信仰の共通点の問題です。

③しかしながら、琉球の場合、アサギで火の神を通す、門中でノロが祀る、こういうのは首里王朝を中心とした地域で発達して、その辺地のほうの奄美等ではまた違っており、さらにトカラも若干違う。ところが、日本全体として見た場合は、アイヌと琉球の間に挟まれたいわゆるヤマト文化圏の中枢部の東日本と西日本、ここでは非常に発達して、さまざまな家レベル・村レベルの火の神信仰があった、非常ににぎやかな状況であります。それを細かに見ていいたらもう深山に迷い込むことになりました。巨視的に見れば、発達したという一言で表せるわけです。日本の火の神信仰はアイヌ・琉球を含む日本列島全体を通した一つの円の中に東日本・西日本を含む小さな円がもう一つ描けるわけで、これもやはり周圍論的な理解が出来はしないかと思うのです。

④トカラの火の神の特色としては、火の神信仰が非常に盛んであるということと共に、屋敷神としての火の神山があるということが最大の特色です。それからネーシが関与していて、その成巫儀礼が太陽信仰ともつながっているということ。さらに、修験道の影響が色濃いということも指摘できます。

⑤火の神の司祭管理者について述べると、全国を通して、主婦が火の神を管理するという一大特色があります。しかしながら琉球の場合には、家の火の神は主婦とユタが関与しますが、村レベルあるいは門中等の場合には、ノロが司祭します。これに対してヤマトの場合には、家レベルの火の神は主婦が管理しますが、村レベル(神社など)の火の神は男性の神職が管理するという大きな違いを指摘できます。

⑥火の神の形態的特色については、沖繩・奄美を一緒に見ますと、五二頁の図の沖繩の①のウムチムンと奄美の①のミツモンは、これを一つにくくることができます。これを第一段階にして、次は沖繩の②③のウカマガナシと奄美の②イのウカマガナシ、③イのヒョンナラシをこれも上下をくくって第二段階とします。それから沖繩の④のヒヌカンと奄美の④イ、④ロのヒニヤハンガナシをくくりますとこれが第三段階です。この段階でカマド型が小型になって、象徴化していきます。そして最後の⑤のヒヌカンと⑤イのヒニヤハンガナシが第四段階で、これが現在の段階であります。このように、火

の神の形態も祭祀も琉球各地で刻々に変化発展して来たということを指摘できます。

⑦火の神の機能的発展については、防災、防火、降魔、家の守護、屋敷守護、宝島の牛の守護などから、宮城県のカマガミのように土間の入口を守る機能など、多方面に働いています。

⑧火の神と屋内神について、その拝礼順を述べると、沖繩・奄美の場合には第一に火の神を拝み、次に位牌を拝むこと。トカラの場合は第一にウチガミを拝み、二番目に火の神を拝み、次に仏、そして火の神山に参拝する。ヤマトの場合には、第一に仏様を拝み、二番目にウチガミ、三番目に先祖棚、四番目に火の神を拝む。あるいは火の神が大黒に代わっておれば大黒を拝む。琉球からトカラ、ヤマトと北上するにつれて、このように火の神がだんだん後退してきます。

⑨大きな火祭りウチガミと小さな火祭り。例えば東北の、特に山形県のオサイトの火というのがあります。これはワラ東で修験者の柴燈護摩みたいな小さいのを作り、十五歳になる子供が火をつけるのだそうですが、こうして祀るという形などもあります。これなどは言葉からして明らかに修験者の影響が見られます。このように、日本の火祭りは修験者を介在して日本本土で発展したということが言えます。でも、小さな火祭りこそ、日本の本来の火祭りであるということを忘れてはならないと思います。

注

- (1) 伊波普猷「火の神考」〔『伊波普猷選集』中巻、一九六二年、沖繩タイムス社〕
- (2) 仲原善忠「太陽崇拜と火の神」〔『日本民俗学大系』第十二巻、一九五九年、平凡社〕
- (3) 郷田洋文「竈神考」〔『日本民俗学』二ノ四〕
- (4) 窪 徳忠「竈神とフィヌカンとヒニヤハム」〔『中国文化と南島』、一九八一年、第一書房〕、「徳之島の竈神信仰」〔『徳之島調査報告書』No.2、一九八五年、沖繩国際大学南島文化研究所〕、「奄美喜界島の竈神信仰」〔『仲松弥秀先生傘寿記念論文集・神・村・人』、一九九一年、第一書房〕
- (5) 酒井卯作「火の神信仰の系譜」〔『南島研究』第二号、一九六五年、南島研究会〕
- (6) 大林太良「太陽と火」〔『日本民俗文化大系2 太陽と月』、一九八三年、小学館〕
- (7) 大林太良「東と西 海と山―日本の文化領域―」(一九九〇年、小学館)
- (8) 三崎一夫「宮城県の火の民俗」〔『北海道・東北地方の火の民俗』、一九八四年、明玄書房〕
- (9) 藤本英夫「北海道の火の民俗」〔『北海道・東北地方の火の民俗』、一九八四年、明玄書房〕
- (10) 下野敏見「鬼火焚き・門松の意味するもの―二つの火祭り・二つの正月―」〔『東シナ海文化圏の民俗』、一九八九年、未来社〕
- (11) 武田 正「山形県の火の民俗」〔『北海道・東北地方の火の民俗』、一九八四年、明玄書房〕

(本稿は、平成七年九月十一日、国際日本文化研究センターでの共同研究「日本文化の深層と沖繩」の研究会の折、口頭発表したものの録音稿を文章体に改めたものである。テープ起こしについては鹿児島県民具学会幹事の井上賢一氏の協力を得た。)